

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第136回 ●

■ 早川さん追悼



追悼記事を書くのはいつもつらいが、早川さんの追悼記事をこんなに早く書くことになるとは思わなかった。早川さんとの付き合いは思えば長い。私が最初に

京都連珠家の門を叩いたのが昭和59年(1984年)2月のことである。その時は事務所は古いままで、土曜日には道場を開いていた。元気のある子供たちが集まってきたてはわいわいやっていた。私は大学生だったの、すぐに通うようになり、ご自宅で夕食をごちそうにもなっていた。翌月の3月に開催された登竜門戦では見事6連敗を喫し、当時中学生の早川強君にも惨敗したことから、京都のレベル恐るべし、との印象を持った。その後は西園さんや長谷川さんなどのライバルにも恵まれ、名人にまでなれたのは幸運だったが、早川さんには主に普及活動と一緒に行動したのが思い出に残っている。

古い所ではロイヤルホテルで正月に宿泊客(医者など富裕層が正月にこもる)相手に連珠の指導をしたり、関西ローカルTVで連珠の

解説をしたりしたが、早川さんは夕刊フジへの原稿書き(中村名人に挑戦、東西対抗戦など)、京都新聞への詰連珠の投稿など新聞社とのつながりも強かった。私は講評を手伝ったり、京都新聞の詰連珠に研究室の仲間の名前で応募したりして協力していた。

私が京都連珠会に入った59年8月にはスウェーデンの(爆笑)報告会があり、家族で海外普及に努めていた。ただ、それを快く思わない人もおり、「なぜ国内ではなくスウェーデン?」スウェーデン募金を毎回払うのがちよつと、「という声を聞いたことがあった。私としては外からやってきたのでそれほど感じてはいなかったが、古くから京都連珠会に参加している方は早川さんのやることにこれまで全面的に支援していたが、海外普及には全面的には支援できなかったのだらうと

思う。当時は既に西山さんとの確執が知られていたが、敵も味方も多い人だった。その根本要因として、早川さんが個人事業者(社長)だったことにあると思っている。社長であれば自分の思ったことがほぼできる。ただ、それは会社という組織だからであり、逆に趣味の会とか自治会などが一番まとまらない。皆が好きかって言う、好き勝手するかである。ただ、早川さんはそういうハンデをもつていらず、普及活動に邁進していた。その情熱のおかげで88年にRIFができ、89年に第1回世界戦が京都で行われた。この頃から10年ぐらいたったと思われる。よく飲み会で言っていたのは「名人と理事長を東京から京都に持ってくる」だった(正確には思っていないが)。京都のメンバーにとっては打倒中村茂だったし、誰もが

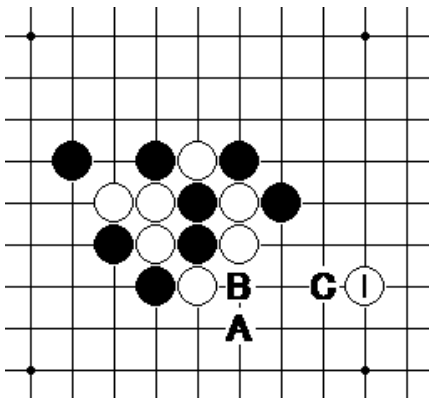
連珠社に不満を持っていたことは確かだろう。後に理事長となった早川さんは連珠社改革を行い、全国を行脚された。

2000年代に入り、早川さんのモチベーションが目に見えて落ちてきた。その頃私も彦根に転勤で京都に行けなくなり、少し心配していた。そして2001年の京都での世界戦、奥様がなかなか動かない早川さんを心配していた。さすがにぎりぎりになって動き始めたが、そこで燃え尽きてしまった。ちようどその頃理事間で揉め事があり、連珠社理事長も辞任されてしまった。

その後しばらく隠居されていたが、私が理事長になって再び連絡を取るようになった。冒頭の写真は2011年のものである。西田さんに仲介してもらい、再び会うこととなった。ただ、早川さんは随分復活することになった。ためらっており、寄附が

あつても必ず匿名で、とお願ひされていた。今後も連珠社を見守ってもらいたいと願っていたが、まさかこんな形でお別れになるとは思わなかった。

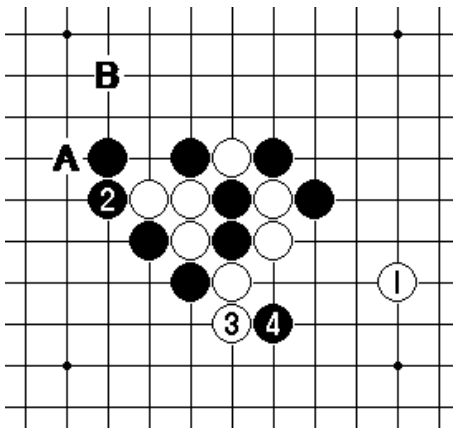
さて、早川さんはこれまでいくつか本を書いているが、『これが連珠だ』は傑作だろう。ただ、「これは難しすぎる」との評価が多かった。私も実際に手にしたのはかなり後だったが、確かに難しい。その内容を少しご紹介しよう。



『白1と打ってA B Cの四迫を残してきた。この

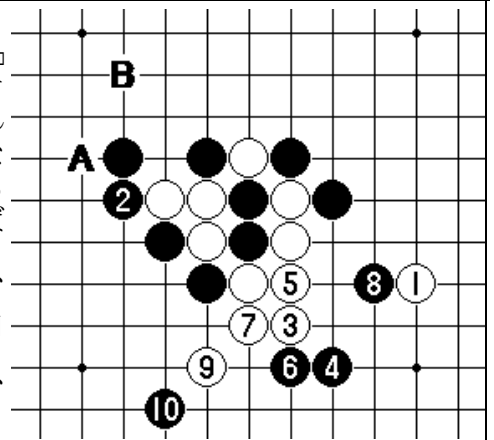
あと黒にどのような展開が考えられるだろうか?』とあり、この問題に限らず考えさせる系の問題が多い。この問題の回答としては、次の図が示されていた。

〈解説1〉



『白の四迫いを黒2とノルのが急戦法である。譜の白3はやむを得ない。だが、それなら黒4と白の四先をタタいて十分の姿である。このあとAやBが楽しみである。』

〈解説2〉



『それならばと、白3、5とノビてから7と防いでおくのが当然考えられる。これには黒8が急所の一撃だ。白9なら黒10とおとなしくついていくのがミソ。やはり黒AとBを睨んで楽しみな局面である。』この後もう1図解説があり従来の連珠本とは内容が全く違うのに驚いた。連珠世界の記事並みに解説がしてある。これは確かに難しい。でも連珠の魅力を一生懸命伝えようとしている。情熱の塊の人であった。